

日本語の可能動詞

中 野 琴 代

目 次

1. はじめに
2. 可能表現の形態とその内容の変遷—動作主体性の発達
3. 動詞の可能形
 - 3-1. 有対動詞（自動詞と他動詞）の場合
 - 3-1-1～3-1-12. 語末音韻形態の分類に沿って
 - 3-2. その他の自他動詞
 - 3-3. 「スル」動詞
4. 可能動詞の証明
5. おわりに

1. はじめに

日本語の可能動詞が混乱している。初めに断っておかなければならないが、「可能動詞」と「動詞の可能形」はイコールではない。「可能動詞」は「動詞の可能形」による可能表現の範疇に属するが、その一部であって全てではない。

日本語の可能動詞とは五段動詞⁽¹⁾語幹に-eruを付加したもの「書ける、読める、話せる」等を指し、この可能動詞の音韻形態からの類推により一段動詞⁽¹⁾の語幹に-reruを付加したもの「見れる、着れる、食べれる」及びカ変動詞「来る」⁽¹⁾の「来れる」が、いわゆる「ら抜き」動詞である。さらに最近では、「ら抜き」動詞語尾「れる」の「れ」が五段動詞の可能動詞形にくっついて「書けれる、読めれる、話せれる」、また「ら抜き」動詞そのものにもさらに「れ」を足して「見れれる、着れれる、食べれれる」となる「レタス（れ足す）」動詞も発生している。このうち、現時点で公に標準的な形態と認められるのは最初にあげた「書ける、読める」等の可能動詞であり、「ら抜き」についてはその現象が早くから指摘され、話し言葉では既に定着しつつあると指摘される⁽²⁾が、全ての面での標準的形態と認識されるまでには至らず、「レタス（れ足す）」

については一部では使用され始めているようだが、あくまでも鬼っこ扱いでしかない。

このような語形態の混沌—動詞語幹+-eru、-reru、-ereru、rereru—⁽³⁾に加え、これまでには無かった動詞の可能形も見られ、それが正当なものか、または誤った使い方なのか、判断が難しい場合も多々あるようである。その根底には、「可能」について表現形態の混乱だけではなく、概念の認識・理解の混乱が存在していると思われる。それは一朝一夕に生じたものではなく、長い時間の中での変化—形態と内容の両方の変化—であり、その変化に人々の認識が追いついていない、言い方を変えれば、言語の変化と言語を使用する側の人間の意識の間にズレが生じていることが考えられる。

本論では日本語の可能表現の中でも特に可能動詞に焦点を当て、可能表現についてどのような状況でどのような問題が発生するのかを考えていく。

2. 可能表現の形態とその内容の変遷—動作主体性の発達

現在使用されている日本語の中で、動詞の可能表現「～の行為が可能（または不可能）」を表わすものをあげる。この中では①と②が古く、次いで③の早い例が中世末より、④の出現は近世末である。

- ① 動詞連用形+ウル／エル
- ② 動詞未然形+レル／ラレル
- ③ 可能動詞
- ④ 動詞連体形+コトガデキル

これらの表現形態はすべての文に適用されるわけではない。また、ある特定条件のもとでは特定の表現という固定された、互いに相補分布を為すものではなく、相互に置換可能となる場合もあれば、そうならないものもある。どの表現形態を取るかは、文体、動詞の条件、命題内容、また個人の意識等に

よってさまざまである⁽⁴⁾。

①「動詞連用形+ウル／エル（得る）」は、現在ではやや格式ばった表現と見なされており、「考える、あり得る」等の決まった動詞との結合でしか用いられない。②「動詞未然形+レル／ラレル」は可能概念以外に受身、自発、尊敬の概念も表わす形態であり、その区別は文内容により判断される。一段動詞（上一段、下一段）ではこの形が可能の標準形態とされ、「ら抜き」は簡略的表現と見なされる（上述）。

例1：好き嫌いが無いのでどんなものでも食べられる。（食べれる（ら抜き））

一方、五段動詞では③可能動詞「動詞語幹+eru」が標準形、かつ一般的であり、②の「五段動詞未然形+reru」は現在では慣用表現やごく少数の動詞にしか用いられていない。

例2：泣くに泣かれぬ気持ち（慣用表現 泣くに泣けない（?））

例3：止むに止まれぬ（慣用表現 止むに止めない（*））

例4：今日はどうしても行かれない（「行けない」と共存）

例5：一人で帰られる。（「帰れる」と共存）

可能動詞の起源は、「読む」等の働きかけ他動詞の一部に対し「（そのように）読む」という自動詞的性質の表現として使用されるようになり、さらに「動詞+ウル」からの音変化（融合）で「動詞語幹+eru」という形態で様々な動詞に適用され、近世に入り量産されるようになったとされる⁽⁵⁾。このような出自からして原動詞が働きかけ他動性の動作主体性を持つ場合、その可能動詞も「動作主体性」とつながることが考えられる。

④「動詞連体形+コトガデキル」の「デキル」は本来「する」の可能形である。この表現形態は、動詞部と可能を表わす「デキル」とが分離していることから②「レル／ラレル」形や③可能動詞の融合性という性質に対して分析的とされ、文章語として用いられることが多い。またその性質・構造から否定形の可能、受身形の可能等、広範囲な使用が許容され、他の形態では表わせないものも表現可能となることがある。

例6：何も言いたくなければ言わないことができる。（「言わない」の可能形は無い）

例7：グループの一員として認められることができた。（認められる（*））

また、この表現形態は、やはり融合的な可能表現では表わせない動作主体性の低い内容も許されることがある。

例8：友人の機転でなんとか助かることができた。（助かられた（*））

しかし、この「～コトガデキル」は以下のような慣用表現ではすわりが悪い。

例9：背に腹は代えられぬ。（背に腹を代えることはできない（?））

例10：あいつは話せる男だ。（あいつは話すことができる男だ（?））

例11：あいつは食えない人間だ。（あいつは食うことができない人間だ（*））

通時的に見ると、日本語の可能表現は、その意味を「自発：主体の意志とは関係なく動作が実現してしまう」に由来するという説が有力であり、古代から中世の資料ではそのほとんどが否定形として現れる。続く中世から近世にかけて「レル／ラレル」の表現形態はその概念内容を「自発」から「受身」「可能」「尊敬」へと膨らませていき、一方で、中世末より可能動詞という、動作主の意志・主体性とながる、行動実現能力を表す形態が発生する（上述）。さらに近世に入り、「可能」概念を分析的、客観的に記述しようとする「～コトガデキル」の形態の出現等、可能表現はその形態、内容とも拡大、発展させてきた。

森田（1995）は「日本語の「られる」の発想」の中で、「られる」によって表わされる自発、受身、可能、尊敬は「それらは皆そのような状況を生み出す「ある存在」と、それを受け止める「こちらの側」との、二者関係の問題である」という共通の概念—上位者と下位者の関係—を共有するとし、可能について二種類に分類している。その一つは「自然可能：外的条件によって当方側の欲望や希望がかなえられるという点で、可能の意味が加わる」ことであり、「（外的）条件次第ということは、それに左右される当方は「下位者」と位置づけ、もう一つを「能力所有の可能：その主体の能力は自身が身につけている力によるわけで、外的条件となるある困難な事態～（中略）～に対抗してそれを克服し得る」

もの、その場合「下位者の立場である当方が、外なる大きな力に抗してそれを乗り越える、その点では弱者の色彩が弱まった「られる」の用法である」としている⁽⁶⁾。

渋谷（1993）は、「可能文を構成する動詞の問題」
として「動作主の主体性：主語名詞が動詞の表わす動きに対してどれだけ自律的に関与（支配）しているか」⁽⁷⁾ということ、「可能文を構成する命題内容」
として動作が「常に話し手が期待する動作、より正確には動作主体が期待している（待ち望んでいる）であろうと話し手が考える動作でなければならない」という2点を重要な基準としてあげている。そして、それを踏まえた上で、可能には「実現系可能」と「潜在系可能」の二種類があり、その両方に適用される「可能の条件スケール」として以下のものを提示している。（下表参照）

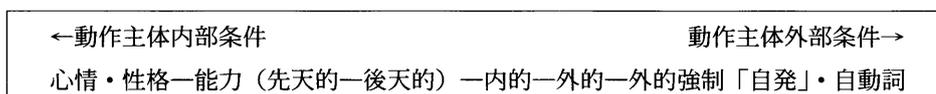
スケールの左へ行くほど、動作を行う人間（動作主）の主体性が発揮され、反対に右へ向かうほど動作主以外の要因が介入、影響が大きくなり、動作主の主体性が抑制されることになる。

森田、渋谷両者とも、動詞の可能表現は「動作主の主体性」と「外的条件」という2方向の関わりによってその内容が構成されるとする点は共通している。

日本語の可能表現は、その歴史変遷の中で、その意味内容を「自発」概念から「受身」「可能」「尊敬」と範囲を拡大し、さらに外部条件によって可能／不可能が決まるという「外的条件」中心から、動作を行う「有生物（動作主）の主体性」重視への、二方向の関わりによってさまざまな内容が提示されるようになったこと、また形態的にも意味内容の拡大・発展とともに様々な可能形（「ら抜き」「れ足す」含め、上述）が存在するようになってきていることが見て取れる。この結果として共時的に、現在の可能表現には様々な意味と形態が共存、入り組んで存在しているという状況が発生しているのである。

以下、動詞の可能形、及びその内容を考察していく。

□渋谷の「可能の条件スケール」⁽⁸⁾



3. 動詞の可能形

考察は、自動詞と他動詞の対立を持つ有対動詞の可能形を中心に進める。典型的な自他動詞のペアでは、以下のような統語的・意味的対応が存在し⁽⁹⁾、「動作主体性」の関わりが明確に捉えられると考えるからである。日本語自他動詞のうち、他動詞のほとんどは対象への働きかけの意志、「動作主体性」を持つ動詞である。

□典型的自他動詞の統語的・意味的対応： Xガ自動詞 ⇔ YガXヲ他動詞

例12：計画が変わった。（自動詞文）⇔太郎が計画を変えた。（他動詞文）

3-1. 有対動詞（自動詞と他動詞）の場合

自他動詞の語末音韻形態の分類に沿って進める。

前者が自動詞、後者が他動詞である。語末音韻形態の後（ ）内は動詞活用、自他ペアの自動詞、他動詞それぞれの後（ ）内はその可能形である。例文の後（ ）内は可能の意味を表わし、可能表現として問題が有る場合「？」を、また可能表現として成立しないと考えられるものに「*」を付けている。

3-1-1. ARU（五段動詞）—U（五段動詞）

- ・ふさがる（ふさがれる？）—ふさぐ（ふさげる）
- ・くるまる（くるまれる）—くるむ（くるめる）
- ・つかまる（つかまれる）—つかむ（つかめる）
- ・またがる（またがれる）—またぐ（またげる）

この型の自他動詞は多くない。他動詞は主語の動作主体性と適切な命題内容という条件（以下、可能成立条件と称する）があれば可能文が成立する。

例13：その程度の穴なら土嚢で十分ふさげる。
（動作主体「ふさぐ人」の外的条件 「土嚢」は道具格）

例14：この鉄アレイが片手でつかめる。（動作主体「つかむ人」の能力条件）

自動詞ではどうだろう。自動詞可能形（可能動詞）は動詞語尾「ル」、他動詞の受身、尊敬の形態

と同じとなる。

例15：その穴は土嚢でふさがれた（受身文（可）、可能文（?））／ふさがった。（自動詞文）

例16：その袋は片手でつかまれる可能文（?）／つかまった（*）

自動詞「ふさがる」では、働きかけ動作「ふさぐ」の対象格「穴」が自動詞文主語となるか、または「土嚢」（道具格）によって「ふさがれる」受身文主語となる場合は自然であるが、自動詞可能文としては成立しにくい。この場合、「その穴がふさがる」という状況に動作主体性が含意されないことがその原因と考えられる。動作主体性の無い内容でも自動詞文であれば十分成立する。

例17：傷口が自然にふさがった。（自然の治癒力）

「つかまる—つかむ」では元々、自他動詞間で統語的・意味的対応が成立していない。

例18：男が女の腕をつかむ≠女の腕が（男によって）つかまる（*）

したがって自他の統語的・意味的対応を持つ可能文はできないが、それぞれ別個の自他動詞文として、可能成立条件が備われば可能文が成立する。

例19：私は満員電車の中で何とかつり革につかまれた。（動作主体の能力条件）

その他の「くるまる—くるむ」「またがる—またぐ」も同様であり、可能文が成立するかどうかは主語（動作主体性）と命題内容次第である。

3-1-2. ARU（五段動詞）—ERU（下一段動詞）

- ・上がる（上がる）— 上げる（上げられる）
- ・かかる（かかる）— かける（かけられる）
- ・終わる（終わる）— 終える（終えられる）
- ・変わる（変わる）— 変える（変えられる）
- ・集まる（集まる）— 集める（集められる）
- ・止まる（止まる）— 止める（止められる）
- ・植わる（植わる*）— 植える（植えられる）
- ・固まる（固まる）— 固める（固められる）
- ・決まる（決まる）— 決める（決められる）
- ・すわる（すわる）— すえる（すえられる）
- ・高まる（高まる）— 高める（高められる）
- ・伝わる（伝わる?）— 伝える（伝えられる）
- ・もうかる（もうかれる?）— もうける（もうけられる）
- ・休まる（休まる）— 休める（休められる）

※休む（自他動詞）→休める（可能形）

- ・弱まる（弱まれる?）— 弱める（弱められる）
- ・受かる（受かれる?）— 受ける（受けられる）
- ・加わる（加われる）— 加える（加えられる）
- ・助かる（助かれる?）— 助ける（助けられる）
- ・見つかる（見つかれる?）— 見つける（見つけられる）
- ・あずかる（あずかれる）— あずける（あずけられる）等

最も数の多い、統語的・意味的に対応する典型的自他動詞の型である。他動詞は一段活用、形態的には受身や尊敬と同形態の「～られる」形、または「ら抜き」動詞となる。主語となる名詞句は動作主体性が高いものが想定されやすく、動作の対象格を有するものであり、命題内容さえ適切であれば可能文が成立する。

例20：18歳以上ならだれでも試験が受けられる。（動作主体の能力条件（年齢））

例21：資金はいくらでも集められる。（動作主体「集める人」の能力条件）

例22：ここなら心と体が休められる。（動作主体「休む人」の外的条件（ここ））

自動詞の場合も、可能成立条件が揃えば可能文が成立する。

例23：交通が便利なら、お年よりがもっと医者にかかれるのに。（動作主体の外的条件（交通））

例24：車は急に止まらない。（動作主体「車」（擬人化）の能力条件）

自他動詞どちらにも動作主体性が存在するものも多い。

例25：安心して子供をあずけられる託児所。（動作主体の心情・性格条件）

例26：規定により危険物はあずかれません。（動作主体の内的条件）

しかし自動詞「植わる、決まる、伝わる、もうかる、見つかる」等では主語に動作主体性を持つ有生名詞句が想定できず、可能文が成立しないと考えられる。自動詞文では成立する。

例27：失くしたサイフが簡単に見つかる（*）／サイフが見つかった。（自動詞文）

「サイフ」は動作主体性を持つ他動詞「見つける」の対象格であって自動詞「見つかる」には主体性が無い。

自動詞「弱まる」は可能文命題内容の希望・期待

という概念と繋がりやすく、文として成立しにくいと思われる。

例28：足が弱まれて車椅子に乗れる。(＊)

「受かる」「助かる」は可能形(可能動詞)では不自然だが、「～コトガデキル」の形態では成立することがある⁽⁸⁾。

例29：懸命な治療によって助かることができた。
(動作主体の外的条件)

例30：努力によって試験に受かることができた
(動作主体の外的条件)

動詞そのものには動作主体性があまり無くても、他の要素—「懸命な治療」「努力」—で主体性を強調することによって成立する例である。

この型の自動詞可能形(可能動詞)はその語尾が「～れる」の、「ら抜き」動詞と同じ形態となり、まちがわれやすいものとなる。

3-1-3. U(五段動詞)—ERU(下一段動詞)

- ・開く(開ける)—開ける(開けられる)
- ・育つ(育てる?)—育てる(育てられる)
- ・立つ(立てる)—立てる(立てられる)
- ・進む(進める)—進める(進められる)
- ・いたむ(いためる?)—いためる(いためられる?)
- ・縮む(縮める)—縮める(縮められる)
- ・届く(届ける?)—届ける(届けられる)
- ・ゆるむ(ゆるめる?)—ゆるめる(ゆるめられる)
- ・続く(続ける)—続ける(続けられる)等

自動詞可能形(可能動詞)と他動詞形が同形となる。他動詞は可能成立条件が整えば可能文成立、どちらかでも条件が整わなければ不成立である。

例31：頑丈そうなドアだが、子供でも開けられる。(動作主体「開ける人」の能力条件)

例32：仕事を辞めようと思えば、いつでもやめられる。(動作主心情・性格または外的条件)

例33：裸足で走れば、ひざが痛められる。(＊命題不適切)

自動詞可能形と他動詞は同形態であっても文の内容からほとんどの場合、どちらかに判断される。

例34：悪天候で視界が悪く、中々先へ進めない。
(自動詞可能文 動作主体の外的条件)

例35：何度か折衝を持ったが、条件が折り合わず、交渉が進められない。(他動詞文 動作主体

の外的条件)

しかし次の自動詞可能文は有生名詞句主語であるが、不成立である。

例36：私はだれの保護も受けず、一人で育てた
(＊ 動作主体の能力条件(?))

例37：彼は身長が2メートルを超し、頭が天井に届ける。(＊ 動作主体の能力条件(?))

動作主体性を補強すると「～コトガデキル」の形で成立する。

例38：私は出生時、未熟児であったにもかかわらず、親の愛情の下で育つことができた。(動作主体の外的条件)

例39：努力すれば、合格基準に届くことができる。(動作主体の外的条件)

「育つ」「届く」とも、それぞれ「成長する過程」「立つという動作」の中で主体性を持って働きかけるのは「育てる人」や「体を動かす人」であり、「成長する本人」や「頭」ではない。つまり自動詞「育つ」「届く」には主体性はほとんど無いと考えられる。「～コトガデキル」例は外的条件「親の愛情」「努力」補足によって成立したものである。

また命題内容がふさわしくなければ成立しないのは自他動詞ともである。「いたむ、ゆるむ」では動詞の意味が期待、希望という内容とつながらず、命題として成り立たない。

音韻的観点から見ると、この類の他動詞可能形は少なくとも5拍以上の多音節語となり、「ら抜き」動詞となる可能性が高い。

3-1-4. ERU(下一段動詞)—U(五段動詞)

- ・取れる(取られる*)—取る(取れる)
- ・切れる(切られる*)—切る(切れる)
- ・焼ける(焼けられる*)—焼く(焼ける)
- ・破れる(破られる*)—破る(破れる)
- ・割れる(割られる*)—割る(割れる)
- ・折れる(折られる*)—折る(折れる)

自動詞形と他動詞可能形(可能動詞)が同形態となる。その区別は内容から判断される。

例40：爪が割れていることに気がついた。(自動詞文。自動詞文では「テイル」形が可能)

例41：プラスチック製レンズは割ろうとしても割れない。(他動詞可能文 動作主体の能力条件)

自動詞文は自然発生的、他動詞文では話者である

「人」が主語（動作主）であり、「レンズを割る」という意図が示されている。

このタイプの自動詞はいずれも有生名詞句（動作主）を取ることが無く、自動詞文主語は他動詞文動作の対象格である。

例42：シャツのボタンが取れてしまった。（自動詞文）

例43：朝、起きてみたら庭の木の枝が折れていた。（自動詞文）

「シャツのボタン」にしる、「庭の木の枝」にしる、「取れる」「折れる」原因は他にあり、動作主体ではない。自力では何ともならないという自発の概念に近い内容である。動作の主体性が限りなくゼロであれば「～コトガデキル」形態でも可能文不成立である。

3-1-5. ERU（下一段動詞）—ASU（五段動詞）

- ・出る（出られる）— 出す（出せる）
- ・生える（生えられる*）— 生やす（生やせる）
- ・さめる（さめられる?）— さます（さませる）
- ・荒れる（荒れられる*）— 荒らす（荒らせる）
- ・枯れる（枯れられる*）— 枯らす（枯らせる）
- ・燃える（燃えられる）— 燃やす（燃やせる）
- ・遅れる（遅れられる）— 遅らす（遅らせる）
- ・慣れる（慣れられる）— 慣らす（慣らせる）
- ・逃げる（逃げられる）— 逃がす（逃がせる）等

他動詞可能形（可能動詞）は一見使役形「～せる」と同形態と思われやすいが、この他動詞群はそのほとんどに於いて主語格（有生名詞句 動作主）が対象格（動作の対象）に働きかける使役「～させる」の意味を兼ねており、可能文と区別される。

例44：海が荒れて舟が出せない。（可能文 外的条件）

例45：うるさい学生を外へ出す。（他動詞文）／学生を外へ出させる。（自動詞「出る」使役文）

例46：時間の余裕があるので出発は多少なら遅らせる。（可能文 動作主体外的条件）

例47：時間の余裕があるので出発を遅らせることができる。（使役文）

自動詞では、主語格の名詞に動作主体性があるかどうかで可能文成立の可否が決まる。有生名詞句主語（動作主体）の「遅れる、超える、慣れる、逃げる、ぬれる」等では可能文は成立するが、「生える、さめる、荒れる、かれる」等では主語の動作主

体性が想定できず（命題内容としても不可の場合も）、「～コトガデキル」の形態でも成立しにくい。

例48：もう逃げられない。袋のねずみだ。（動作主体の能力条件）

例49：この育毛剤を使えば、髪が生えられる。（*）／髪が生えることができる。（?）

例49の「髪」は自然に「生える」か、「生やす」意図を持つ人が何らかの方法を使って初めて「生える」のであって、「生える」自体には動作主体性が無い。

音韻形態としては、「出る→出られる」等の自動詞可能形はら抜き動詞「出れる」に発音されることが多い。

3-1-6. RERU（下一段動詞）—SU（五段動詞）

- ・倒れる（倒れられる）— 倒す（倒せる）
- ・壊れる（壊れられる?）— 壊す（壊せる）
- ・くずれる（くずれられる?）— くずす（くずせる）
- ・けがれる（けがれられる?）— けがす（けがせる）
- ・よごれる（よごれられる?）— よごす（よごせる）
- ・こぼれる（こぼれられる?）— こぼす（こぼせる）
- ・流れる（流れられる?）— 流す（流せる）
- ・あらわれる（あらわれられる?）— あらわす（あらわせる）
- ・離れる（離れられる）— 離す（離せる）等

他動詞可能形（可能動詞）は使役形「～せる」と混同されやすいが、他動詞そのものが使役他動詞であり、「～せる」は可能専用といってよい。可能成立条件がふさわしければ可能文が成立する。

例50：この壁はもろいからすぐ壊せる。（動作主体の能力条件）

例51：無敵のチャンピオンはどんな相手でも倒せる。（動作主体の能力条件）

「流れる、こぼれる、くずれる」等の自動詞は主体性を持つ主語が想定できない。また「こわれる、けがれる、よごれる」等では適切な命題内容設定が難しく、可能文が成立しにくい。自動詞文は成立。

例52：人間の人格は壊れられる。（*「人格」は主体性動詞「壊す」の対称格）

例53：コミュニケーションが無くなると人間の

格が壊れる。(動作主体の外部条件)

他動詞「あらわす」に対立する自動詞「あらわれる」は一見、動作主体性を有するように見える。しかし可能文は不自然である。

例54：やっと佐藤さんがあらわれた。(自動詞文)

例55：やっと佐藤さんがあらわれられた (* 可能文)

この場合、自動詞文の内容構造は以下のようになる。

□自動詞文補文：佐藤さんが {佐藤さんがその姿をあらわす} あらわれる。

他動詞「あらわす」の主体性は「佐藤さん」にあるが、自動詞「あらわれる」はその動作の結果を示すものであって、自動詞文主語「佐藤さん」は他動詞「あらわす」の対象格でしかない。この場合の自動詞「あらわれる」には主体性が無いと考えられ、そのため可能文が成立しないと思われる。

3-1-7. U (五段動詞) —ASU (五段動詞)

- ・減る (減れる?) — 減らす (減らせる)
- ・動く (動ける) — 動かす (動かせる)
- ・かわく (かわける*) — かわかす (かわかせる)
- ・もる (もれる?) — もらす (もらせる)

他動詞は語尾が-asu の、使役他動詞である。他動詞可能は可能成立条件がふさわしければ文として成立する。

例56：食糧の輸入が減らせるかどうかは、今後の対策次第だ。(動作主体の能力条件)

自動詞可能文も可能成立条件が整えば成立、整わなければ不成立である。

例57：束縛するものが無くなり、自由に動ける。(動作主体の外的条件)

例58：天気がいいので、せんとくものがよくかわける (* 動作主体性が無)

例59：情報操作で機密情報がもれる。(可能文としては*、自動詞文としては可)

3-1-8. IRU (上一段動詞) —ASU (五段動詞)

- ・のびる (のびられる) — のばす (のばせる)
- ・みちる (みちられる?) — みたす (みたせる)
- ・生きる (生きられる) — 生かす (生かせる)
- ・懲りる (懲りられる?) — 懲らす (懲らせる)

他動詞は使役他動詞、原形で使役の内容を表わす。自他動詞文とも、可能成立条件が適切であれば

可能文は成立。

例60：締め切りは1日ならのばせる。(動作主体の外的条件)

例61：援助物資が届き、生きのびられた。(動作主体の外的条件)

例62：失敗を知らず、自信にみちられた態度 (* 「自信にみちる」主体性はない、自動詞文としては可)

音韻的に自動詞 (上一段活用) 可能形は「ら抜き」が起こりやすい。

3-1-9. IRU (上一段動詞) —OSU (五段動詞)

- ・起きる (起きられる) — 起こす (起こせる)
- ・落ちる (落ちられる?) — 落とす (落とせる)
- ・降りる (降りられる) — 降ろす (降ろせる)
- ・滅びる (滅びられる?) — 滅ぼす (滅ぼせる)

自他動詞文とも、ふさわしい可能成立条件があれば可能文が成立する。この類の他動詞も使役他動詞であり、原形で使役の内容を表わす。

例63：朝5時に一人で起きられた。(動作主体の能力条件)

例64：ひどい朝寝坊でどうしても起こせない。(動作主体の能力条件)

自動詞「落ちる」は動作主体性が低く、動詞の可能形は取れないが、「〜コトガデキル」では成立することもある。

例65：(狙ったとおりに) うまく定位置に落ちることができた。

自動詞「滅びる」は動作主体性が無いことに加えて、適切な命題内容設定が困難で可能文は成立しないと思われる。

例66：どんな生物でも滅びられる (*)

自動詞 (上一段活用) 可能形は「ら抜き」動詞に発音されやすい。

3-1-10. RU (五段動詞) —SU (五段動詞)

- ・残る (残れる) — 残す (残せる)
- ・うつる (うつれる) — うつつ (うつせる)
- ・起こる (起これる?) — 起こす (起こせる)
- ・かえる (かえられる) — かえす (かえせる)
- ・くだる (くだれる?) — くだす (くだせる)
- ・通る (通れる) — 通す (通せる)
- ・なおる (なおれる?) — なおす (なおせる)
- ・回る (回れる) — 回す (回せる) 等

条件 (動作主体性及び命題内容) 次第で自他動詞

文とも可能文が成立する。他動詞原形は使役兼用。

例67：地層が固く、パイプを通せない。(他動詞可能文 動作主体の外的条件)

例68：道路の幅員が狭く、大型車両は通れない。(自動詞可能文 動作主体の外的条件)

例69：成績が上がり、上のクラスにうつれた。(自動詞可能文 動作主体の能力条件)

例70：時代がうつれる (* 動作主体性が無いため)

自動詞「かえる(帰る、返る)」(五段動詞)は「かえられる」(可能動詞)と「かえられる」(ラレル形)の両方が現在も使用されている。

3-1-11. IRU (上一段動詞) — SERU (下一段動詞)

- ・着る(着られる) — 着せる(着せられる)
- ・浴びる(浴びられる) — 浴びせる(浴びせられる)
- ・似る(似られる*) — 似せる(似せられる)
- ・※乗る(乗れる) — 乗せる(乗せられる)

他動詞は原形語尾「～せる」の、使役的他動詞であり、可能形は使役受身とよく似た形態となる。自動詞文、他動詞文とも、可能成立条件が適えば可能文が成立する。

例71：浴衣なら一人で着られる(動作主体の能力条件)

例72：着付けをならったから、他の人に着物を着せられる(動作主体の能力条件)

例73：いやだといったのに、無理やり着物を着せられた。(使役受身)

自動詞「乗る」は五段活用で他の自動詞と活用が異なるが、語尾形態によりここに分類した。動作主体性、適切な命題が成り立つ動詞である。

例74：子供が一人でバスに乗れる。(動作主の能力条件)

例75：この車は7人乗せられる。(動作主「車」(擬人化)の能力条件)

自動詞「似る」は動作主体性の想定が困難である。

例76：わたしは父を尊敬しているので父に似たいと思うが似れない(*)

自他動詞とも「ラレル」可能形で尊敬、尊敬等同形態であり、したがって両者とも(特に自動詞可能形)「ら抜き」で発音されやすい。

3-1-12. その他

- ・見える(見えられる* 下一段動詞) — 見る(見られる 上一段動詞)
- ・消える(消えられる? 下一段動詞) — 消す(消せる 五段動詞)
- ・聞こえる(聞こえられる* 下一段動詞) — 聞く(聞ける 五段動詞)
- ・生まれる(生まれる? 下一段動詞) — 生む(生める 五段動詞)
- ・入る(入れる 下一段動詞) — 入れる(入れられる 下一段動詞)

自他動詞群とも原形の音韻形態は似かよっているが、可能動詞形では異なり、不規則な類である。

他動詞群は可能成立条件さえ整えば可能文は成立する。

例77：飛行機の中で映画が見られる。(動作主体の外的条件)

例78：いやな記憶は消せない。(動作主体の心情条件)

例79：ようやく彼の本音が聞けた。(動作主体の能力条件)

例80：経済的条件が整わなければ子供は生めない。(動作主体の外的条件)

自動詞群の「見える、聞こえる」は「見る(聞く)つもりが無くても、視界(耳)に対象が入ってくる」という自発の概念となり、可能文は成立しない。「消える、生まれる」も動作主体性の設定が難しく、成立しにくい。しかし動作主体性を補えば可能となる場合もある。

例81：消臭剤でいやなにおいが消えられた。(*)

例82：マジックを使えば消えることができる。

自動詞「入る」は有生、無生どちらの主語もあるが、可能文では違ってくる。

例83：このドアから入る(自動詞文) / このドアから入れる。(動作主「人」外的条件可能)

例84：このカバンは本が10冊入る。(自動詞文) / このカバンは本が10冊入れる(*)

例85：このカバンに本が10冊入れられる。(他動詞可能文 動作主体の外的条件)

「入る」自動詞文では、「カバン」に収納の能力があるという可能の内容に解釈できるが、動作主体性は無く、「入る」は他動詞「入れる」の結果である。

それぞれの動作主体性中心にその内容を見ると、

□このドアから {人がその体を入れる} 入る。

□このカバンは {人が本を10冊入れる} 入る。

従って「入る」では有生主語（動作主）の場合は可能文が成立するが、無生主語では自動詞文は成立しても可能文としては成り立たない。

3-2. その他の自他動詞

自他動詞の対立を為さない無対動詞である。

□自動詞のみ：ある、謝る、歩く、あわてる、行く、いる、怒る、恐れる、溺れる、輝く、欠ける、曇る、咲く、なる、死ぬ、酔う、迷う等

□他動詞のみ：与える、言う、失う、疑う、打つ、奪う、選ぶ、置く、行う、覚える、思い出す、貸す、借りる、考える、嫌う、殺す、信じる、救う、わすれる等

□自他同形動詞：かまう、組む、楽しむ、笑う、悲しむ、閉じる、開く、増す等

これまで見てきたように、可能形が成立するかどうかは動作主体性の有無、程度と適切な命題内容の二つの条件である。

自動詞のみの動詞には、感情・感覚に関わるものが多く、可能文成立は条件次第である。

例86：知識だけでは立派な医者になれない。（動作主体の能力・内・外的条件）

例87：へとへとで歩けない。（動作主体の能力条件）

例88：彼は怒りたいと思い、実際に怒れた。（*「怒る」動作主体性が低い）

最後の例では、主語「彼」は「怒る」という感情の経験者ではあるが主体性は低い。

一方、他動詞のみの動詞はほとんどの場合、主語（動作主）と働きかける対象格を持ち、可能文が成立するものがほとんどだが、条件に合わなければ成立しない場合もある。

例89：彼の言うことなら信じられる。（動作主体の心理・性格条件）

例90：彼を嫌いになりたいと思い、嫌えた。（*動作主体性が低い）

同じ動詞でも条件次第で可能文が成立、不成立と異なる場合もある。

例91：忘れようと思っても忘れられない人。（動

作主体の心情・性格条件）

例92：（守りたくない）約束を忘れた。（*）／あ、忘れられた（*）

後者の例では動作主体性、命題内容（不本意）共に可能成立条件に適せず、成立しない。

自他同形動詞についても同様である。

例93：彼の才能と力量なら個展が開ける。（他動詞可能文 動作主体性、命題とも適切）

例94：花のつぼみが開けない。（*「つぼみが開く」は自然の力であって動作主体性が無）

3-3. 「スル」動詞

最後に「する」動詞について述べる。この動詞は「漢語名詞+スル」から「漢語名詞+デキル」となるものである。この類の動詞も自動詞、他動詞それぞれの役割があり、三種類に分類する。

□自動詞として：安心する、遠慮する、影響する、がっかりする、感謝する、感心する、苦勞する、故障する、混乱する、満足する、発展する等

□他動詞として：意味する、解釈する、希望する、教育する、許可する、記録する、決心する、検査する、後悔する、約束する等

□自他同形：完成する、決定する、実現する、失敗する等

いずれも条件（主語の動作主体性と命題内容）が適切であれば、可能文は成立する。

例95：この結果には到底、満足できない。（動作主体の心情条件）

例96：あの政治家のコメントは適切なものだと解釈できる。（動作主体の心情・性格条件）

例97：プロジェクトが完成できた。（自動詞可能文）

プロジェクトを完成できた。（他動詞可能文）

「スル」動詞であっても「デキル」とならないものもある。

□「スル」動詞で「デキル」形を取らないもの：愛する（他動詞）、対する（自動詞）

可能文成立条件は他のものと同様である。

例98：私は彼を愛せる。（動作主の心情・性格条件）

例99：純粋な愛情を持ってこどもに対せれば母親

として合格だ。(動作主の能力条件)

□自動詞としての「できる(出来る)」(上一段活用)

この動詞は「物事が生じる、成立する、完成する」の意味では動作主体性が設定されず、可能文は不成立である。

例100: ご飯ができることができた。(*)

「フランス語ができる(能力)」「木でできている机(材料)」の意味でもやはり動作主体性が無いために可能文は成立しない。

4. 可能動詞の証明

これまで見てきたように、可能文の成立には主語と述語関係に於ける動作主体性と、話者にとって好ましい、実現を希望する命題内容という二つの条件が必須であることがわかる。

「動作主体性」の程度について、「～コトガデキル」文では、可能動詞や可能形「ラレル」文より(動作主体性が)低い場合でも成立することがあった。これを逆に見れば、「動作主体性」ゼロの動詞では可能形が作れず、現代日本語の可能文は動作主体性が重要な要素となっていることがわかる。

さらに可能動詞の形態に近付いている「ら抜き」動詞についてみると、意味内容の明確な伝達力という性質が認められる。「ら抜き」という形態は、受身、尊敬の概念を切り離し、可能だけを意味する、つまり、他の解釈を排除して可能の意味一本にしぼるものである。それは、日本語の特性とされる「曖昧さ」から脱却し、明確な固定した意味表現という性質を獲得したことになる。その一方で、一部の慣用表現を除き、可能と自発、受身、尊敬の概念が混ざった微妙な意味内容が、失われつつあることも事実である。

寺村(1982)、森田(1995)では、受身とも、可能、自発とも、また複数にまたがった解釈ができるものとして以下のような例をあげている。

例101: 改悛の情が認められる(受身、自発、可能)(森田の例)

例102: この魚は食べられる(「魚」は受身主語、可能対象格、(寺村「受動的可能表現」例)

前者では「改悛の情」が受け取り手によって認識され(受身)、「認めざるを得ない」(自発)か、「認

めることができよかった」(可能)の意味が重なっている。寺村例でも「この魚」が人間に食べられる(受身)と、「この魚」は食べることができる魚である(可能)の意味がオーバーラップしている。このように「られる」の形態では受け取り手や聞き手の感性、心情、受け取り方によっていろいろに解釈することができ、微妙な内容があらわされるのである。

次に音韻形態について見る。動詞の可能形を日本人(日本語母語話者)は音的にどのように捉えているのだろうか。

可能動詞、「ら抜き」動詞、「れ足す」動詞の語尾-eru, -reru, -ereru, -rereru、さらに一段及びカ変動詞の「ラレル」形から推測されるように、動詞の可能表現は「eru, reru」という音韻形態を持つことが認められる。これは、自動詞「切れる、折れる」「生える、枯れる」「けがれる、あらわれる」「見える、聞こえる」等の可能形を取らない(または取りにくい)、内容として自発概念に近い動詞の語尾形態とも共通するものがある⁽¹⁰⁾。

一つの原因動詞を中心に派生動詞のまとまりを示す条件としてアクセント型がある。動詞のアクセント型は二種類、つまり平板式(アクセントの無い型)か、起伏式の後ろから二番目の拍にアクセントが置かれる型のどちらかである。これは母音の無声化、二重母音等で一拍前にずれることも多少ある。活用(五段活用または一段活用(カ変含む))によって助詞との組み合わせ等でアクセントパターンは異なるところもある。

□起伏型: 見る(●○)、入る(●○○)、歩く(○●○)、集める(○●●○)、

□平板型: 着る(○●)、遊ぶ(○●●)、始める(○●●●)等

一つの動詞語幹から派生するグループ(自他動詞、可能形、受身形、使役形等)は同一のアクセント型となり、アクセント型は原形となる動詞とのつながりを示すマーカーとして役立つ。

可能動詞の条件としては以下の通り。

(1) 動作主体性: 有生主語がその動詞の表わす動作に於いて主体性を持つ

(2) 文の命題内容: 「それをかなえたい」という希望・期待を表現する

(3) 音韻形態: 「eru, reru」という形態を持つ。

アクセント型もその原形動詞とのつながりを示す補助となりえる。

5. おわりに

あらゆる言語に言えることであるが、古今を通じて完璧な言語体系があったことはない。だからこそ言語は変化し、また時代、社会の要請に合わせて時には意図的に、時には気づかれることなく、その一部を変化させてきたし、これからも変化し続けていくであろう。その過程で、それまで無かった条件や性質を獲得することも、反対に失くすこともあるはずであり、日本語の可能表現も例外ではない。可能表現は自発概念から受身、可能へと発展し、その意味内容において動作主体性を発達させてきた。形態的にも「ラレル」形、可能動詞形、「～コトガデキル」形態へと拡充してきている。「動作主体性の発達」という概念が加わったことは人間活動の広がり、人間の達成能力への注目という観点からすると当然の帰結とも言え、それを他の概念と切り離して表わす音韻形態として「ら抜き」「れ足す」動詞という形態が生まれてきたとも考えられるかもしれない。

注

- (1) 日本語教育では、五段動詞→第一類（1グループ動詞）、一段動詞→第二類（2グループ動詞）、カ変動詞「来る」及びサ変動詞「する」を第三類（3グループ動詞）と一般的に称する。このうち、カ変動詞可能形については「来られる」「来れる」どちらも使用されており、一段動詞と同様の「ら抜き」の形態を持つことからカ変動詞は一段動詞の類に入れる。
- (2) 「ら抜き」の早いものとしては、東京語で昭和3年（1928）ごろ、静岡県方言、近江方言ではさらに早くその記載が見られ、「ら抜き」動詞は「都市部よりも周辺部で先に、しかも各々相互の影響もなく独立して用いられたもの」とされる。渋谷（1993）参照
- (3) 「-eru, reru, ereru, rareru」は可能動詞及びそのバリエーション（ら抜き、レタス）であり、一段動詞の可能形語尾「rareru」とは別である。可能動詞、一段動詞とカ変動詞可能形「～られる」、 「ら抜き」及び「れ足す」動詞、これらの動詞は全て一段活用である。

- (4) ほかに「動詞連用形+カネル」「動詞連体形+ワケニハイカナイ」等の表現もあるが、それぞれ独自の心情等を表わし、純粋な動詞の可能としては上述の四つの型である。

例：そのようなことには賛同しかねます。（事情があって賛同したくない→丁重な断り）

例：そんな無謀な計画に賛成するわけにはいかない。（原因・理由と結果を繋ぐ経緯を示す）

- (5) 渋谷（1993）参照
- (6) 森田（1995）記載。「受身」「可能」「尊敬」「自発」の音韻形態と意味の関わりについては寺村（1982）「第3章 態一格の移動と述語の形態との相関」にも詳しい。
- (7) 動詞の意味と動作主の主体性の関わりについては井上（1976）が先駆者的である。

「（可能文は）有生名詞句を主語として持たなければならない。しかも、補文の述語が主語の意志によって制御できる動作を表わす動詞でなければならない。つまり動作主格を主語としなければならないのである」とする。

また、文の意味解釈に於ける文の名詞格について述語の意味によって決定される格を基底の格とし、「述語の意味素性によって決定される基底の格と、表層構造の文法関係によって格助詞が決定される」とする。基底の格については、動作主格、対象格、起点格、経験者格、目標格、助格、原因格、位置格、対称格をあげる。

- (8) 「可能の条件スケール」の各項目例として以下をあげている。渋谷（1993）参照
 - (i) 動作主体の心情・性格条件：はずかしくて結局彼女に話しかけられなかった。
 - (ii) 動作主体の能力条件：日本選手団は実力の差が出てアメリカに勝つことができなかった。
 - (iii) 動作主体の内的条件：その日はからだの調子が悪くて会議に出席できなかった。
 - (iv) 動作主体の外的条件：その日は忙しくて結局会議に出席できなかった。
 - (v) あいつが結婚するなんて考えただけでも笑えてしまった。

さらに「結果可能：条件を無視して単に実現の有無（結果）だけを問題にする用法」として、
・（鉄棒で、今までできなかったわざをはじめて成功させて）できた！

- (9) 寺村（1982）参照。
- (10) 渋谷（1993）では、「ら抜き」動詞の発生は「（五段活用動詞の可能形である）可能動詞のうちレルという形をその一部にもつものに類推して発生した」とし、方言調査等を基に「ら抜き」動詞の音韻形態について、音節数の少ないほうが多いほうより、下一段活用より上一段活用の方が多

いとして、音韻形態について以下のように述べている。

「動詞の形態としては圧倒的に多い (-) CeCu 型に属する上二段活用動詞派生の B 型可能動詞 (ら抜き動詞) のほうが、その数の少ない (-) eCeCu 型に属する下二段動詞派生の B 型可能動詞 (ら抜き動詞) よりも、形態的に受け入れられやすかったと考えるのである」

※ (-) CeCu 型、(-) eCeCu 型の C とは Consonant (子音)

下二段活用動詞派生の (-) eCeCu 型とは「上げれる、やめれる、出れる」等、上二段活用動詞派生の (-) CeCu 型とは「見れる、着れる、起きれる」等である。(筆者注)

参考文献

□辞典類

- ・社団法人日本語教育学会編 (1982) 『日本語教育事典』大修館書店
- ・小泉保・船城道雄・本田晶治・仁田義雄・塚本秀樹編 (1989) 『日本語 基本動詞用法辞典』
- ・NHK放送文化研究所編 (1998) 『NHK 日本語発音アクセント辞典』日本放送出版協会
- ・井上史雄・鎌水兼貴 (2002) 『辞典<新しい日本語>』東洋書林

□単行本・論文

- ・金田一春彦 (1974) 『国語アクセントの史的研究 原理と方法』塙書房
- ・井上和子 (1976) 『変形文法と日本語 (下)』大修館書店
- ・寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 I』(くろしお出版)
- ・井島正博 (1991) 「可能文の多層的分析」『防衛大学校

紀要』55

- ・渋谷勝己 (1993) 「日本語可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』33
 - (1995) 「可能動詞とスルトコガデキル—可能の表現—」『日本語類義表現の文法 (上)』p 111~120 くろしお出版
 - (2007) 「なぜいま日本語バリエーションか」『日本語教育』134
- ・酒井裕 (1992) 『音声アクセントクリニック』凡人社
- ・森田義行 (1995) 『日本語の視点~ことばを創る日本人の発想~』創拓社
- ・安達太郎 (1995) 「思エルと思ワレル」『日本語類義表現の文法 (上)』P121~130 くろしお出版
- ・浅野裕子 (1996) 「「と思われる」にみる日英の語用論的原則」『日本語教育』88
- ・青木ひろみ (1996) 「可能の概念と意味範疇」神田外語大学大学院言語科学研究科修士論文
 - (1997) 「自動詞における《可能》の表現形式と意味—コントロールの概念と主体の意志性—」『日本語教育』93
- ・佐藤勢紀子・仁科浩美 (1997) 「工学系学術論文にみる「と考えられる」の機能」『日本語教育』93
- ・長友文子 (1997) 「可能形における自動詞と他動詞—日本語教育から見た可能表現の研究 (一)—」『和歌山大学教育学部紀要』人文科学第 47 集
 - (1997) 「可能形における自動詞と他動詞—日本語教育から見た可能表現の研究 (二)—」『和歌山大学教育学部紀要』人文科学第 47 集
- ・植田端子 (1998) 「「自発」表現の一考察—自発文の一列—」『日本語教育』96
- ・岩淵匡 (2000) 『日本語文法』白帝社
- ・姚艶玲 (2006) 「有対自動詞による無標可能文の成立条件—<可能>の意味合成のメカニズム—」『日本語教育』128